

# G. H. シューベルトに始まるオムニバス — クライスト、ヘーベル、E. T. A. ホフマン —

工藤 幹巳

## I. はじめに — 動物磁気と夢遊病への関心

19世紀初め、ヨーロッパにおいて動物磁気説と夢遊病に人々の強い関心が寄せられた時期があった。動物磁気説 (Tierischer Magnetismus) とは、ドイツの医者メスマー (Franz Anton Mesmer 1734-1815) が提唱した説(メスマーの名から Mesmerismus ともいう)で、万物相互間に作用する万有引力は、宇宙に偏在する磁氣的性質を帯びた粒子からなる流体によって伝達されるとして、これを動物磁気と呼んだ。動物磁気は特に神経系に作用を及ぼし、潮の干満と同じように収縮と膨張を繰り返す。そのリズムが体内で滞ると病気になると考え、指で患部に触れたり磁気を帯びた物体に触れさせるなどして、流体の力の均衡を回復させ、病気を治そうとした。メスマーは、ルイ 16 世治下のパリで自説を広めたが、医学界の承認を得るには至らなかった。しかし動物磁気説は後の催眠療法の端緒ともなった。<sup>1)</sup>

夢遊病 (Somnambulismus) についても関心が高かったが、夢遊病単独でというより動物磁気治療が夢遊病の対症療法として使用されたためと言ったほうがよい。いわば、医師が治療可能な病気として夢遊病を研究し、治療の実際を公開したり著作によって明らかにしたりしたことが大きな関心と呼んだのである。

このような動物磁気説と夢遊病に関心が寄せられる中で、ロマン主義作

---

1) 『平凡社世界大百科事典』第 11 巻 133 頁、第 20 巻 131 頁、第 28 巻 69 頁。

家たちと交友のあった医師 G. H. シューベルト<sup>2)</sup> (1780-1860) が、19 世紀初頭、ドレーズデンにおいて一連の講演を行ない、これをもとに講演集『自然科学の夜の側面についての見解』(Ansichten von der Nachtseite der Naturwissenschaft) を、1808 年に出版した。この講演集は 14 章からなり、世界を一つの有機体として解明していこうとするもので、宇宙の生成から動植物、人類にまで至る壮大な内容であった。また、シューベルトは夢そのものについても自然科学者の立場から考察し、『夢の象徴学』(Die Symbolik des Traums) も 1814 年に著している。

このシューベルトの講演や著作が、当時のあるいはその後の作家たちの作品に影響を与えたことについては、ドイツ文学史上では比較的知られていると言ってよい事柄である。同時代においては、交友があったとされるクライスト (Heinrich von Kleist 1777-1810) の戯曲『ハイルブロン少女ケートヒェン』、初期ロマン主義作家アルニム (Achim von Arnim 1781-1831) のある長編小説の中のバラード<sup>3)</sup>、ヘーベル (Johann Peter Hebel 1760-1826) の暦物語の一つ『予期せぬ再会』、ホフマン (E. T. A. Hoffmann 1776-1822) の短編『ファールンの鉱山』、等々があり、少し時代を下ると、ホフマンの『ファールンの鉱山』に刺激されて R. ワーグナーがオペラ化を試み、ホフマンスタイルも同名の韻文悲劇を書いた。

このようにシューベルトの講演や著作が多く、の詩人たちに文学的刺激を与え、作品として結実したのは事実であるが、詩人たちはいったいどのよ

---

2) シューベルト (Gotthilf Heinrich Schubert) は、エールツ山脈の北麓ホーエンシュタインに牧師の子として生まれ、のちにライプチヒ大学の神学部に入るが、ギムナージウム (ヴァイマル) 時代の友人の父ヘルダー (Johann Gottfried von Herder 1744-1803) の薦めで専攻変更し、医学部に籍を置く。科学の師として物理学者リターを、哲学の師としてはシェリングを仰いだというシューベルトは、医師として開業しつつ種々の著作にも専念する。進化論のダーウィンの祖父にあたるエラスムス・ダーウィンの著作を翻訳したり、スペインの古い詩のアンソロジーを編んだりした。ティーク、ノヴァーリス、シュレーゲル兄弟、ヴェルナーらのロマン派の文学にも傾倒した。また、彼も当時流行したガルヴァーニ電気療法や動物磁気催眠法による治療も試みている。

3) 『伯爵夫人ドロレスの貧困、富裕、罪、贖罪』中の「最初の鉱夫の永遠の青春」。

うな影響を受けたのか、影響と言っても画一的なものではなく詩人によって異なっているのではないか、それらをクライスト、ヘーベル、ホフマンにおいて探るのが本論の目的である。

## II. シューベルトの「講演」とクライスト

クライストは、1807年、フランス軍による逮捕収監<sup>4)</sup>から解放された後、ドレーズデンにやって来る。そして当地で友人のリューレ、プフウエルと再会し、アーダム・ミュラー、C. G. ケルナー等のロマン主義者たちと交友するとともに、シューベルトとも知り合うことになる。

ドレーズデンに来る以前に、すでにクライストは『シュロツフェンシュタイン家の人々』や『アンフィトリオン』を公にしているし、『こわれ甕』も完成していた。また、ドレーズデンに来てすぐに『ジェロニモとジョゼーフエ』(のちに『チリの地震』と改題)が世に出ることになるなど、徐々に詩人として認められる存在になってきていた。それを裏づけることとして、クライストが囚われの身であった時、姉のウルリーケがフランスの将軍に宛てたフランス語の抗議文の中に次のような件がある。「閣下がもし世論に耳を貸す暇をお持ちならば、わたしの弟がドイツ語の文学界で全然無名のものではないことを、多少注目に値する人間であることを、容易に承知されることと思う。」<sup>5)</sup>これを、弟の解放を願う姉の身内びいきの見方に過ぎないと思えることはできない。ドレーズデンの新聞通信員 K. F. A. ハルトマンも、こう書いている。「極めて優れた現役の詩人の一人であるフォン・クライスト氏が当地におられることは喜ばしいことである。氏は、祖国の祭壇を喜劇『アンフィトリオン』という非常に瑞々しい王冠で飾られた方であり、おそらくは比較的長い期間当地に留まっていただけでありま

4) 同年1月30日に、クライストは友人2名とともにフランス軍によってスパイ容疑で逮捕、7月12日に釈放されている。収監中も『ペンテジレーア』の執筆を続け、『アンフィトリオン』の出版を果たしている。

5) 浜中英田：クライスト研究（筑摩書房）昭和45年 291頁。

しょう。」<sup>6)</sup>

同年、1807年の秋から冬にかけて、シューベルトは自然科学、より厳密に言うなら自然哲学に関する14回にわたる一連の講演を行なっている。これは現代の自然科学的知識から見れば、とるに足らぬ否定されるべき説であろうが、医学のほか天文、地質学、生物学などの自然科学の諸分野、夢や催眠、予知などの現象についても研究したシューベルトによる、当時において最新の研究成果をテーマとした講演であったと考えてよい。

しかしながら、同時代人、特に多くのロマン派詩人たちに与えた影響を考える時、講演の科学的知識というより、この講演の中にちりばめられている事実に基づいたいくつかのエピソード、あたかもグリムの『伝説集』の中の伝説のような内容の話にこそ、詩人たちは心動かされ、創作意欲をかき立てられたのではないだろうか。

ところで、クライストもシューベルトの講演を聞いたと言われている。しかし、シューベルトについてクライスト自身が触れた記録は見当たらない。クライスト全集巻末の Personenregister にも Schubert の名は載っていないのである。仮に、よく言われるように、クライストがシューベルトの講演に大きな感銘を受けたとするなら、手紙や評論等に一度はその名が記録されていてもいいのではないか。これまで多くの研究者によって、クライストはシューベルトの講演から多大な影響を受けたとされてきているが、確たる証拠のあることではないのである。

だからとは言え、両者の関係が全く疎遠なものであったとはもちろん言えない。この年(1807年)の12月、アードム・ミュラーはゲーテに宛てた書簡の中で、翌年に出版する計画の雑誌『フェーブス』(Phöbus)に関連して次のように書いている。「彼(クライスト)と Dr. シューベルトが私の計画に参画します。この計画はしかるべき資金で支えられていますし、芸術

---

6) Heinrich von Kleists Lebensspuren. Dokumente und Berichte der Zeitgenossen. Hrsg. von Helmut Sembdner. Dokumente zu Kleist Bd.1 Frankfurt a.M. (Insel) 1984, S.152. (K. F. A. Hartmann Morgenblatt. 3. Okt. 1807)

に対して豊かな実りをもたらすことになるでしょう。」<sup>7)</sup>実際には、ミュラーとクライストの2人だけが編集者として名を連ねることになるが、参画者の一人としてシューベルトの名があげられている。この事実と、一方でクライストが記録に残らないほどシューベルトの名を一度もあげていないことから、むしろクライストとシューベルトは、ドレーズデンの「文学 Kreis」のメンバーとして付き合う関係であったと考えていいだろう。したがって、確証がないにせよ、シューベルトの講演をクライストが聞いた可能性は十分ある。

## II-1. シューベルトの寄稿

1808年1月に、『芸術誌 フェーブス』(Phöbus — Ein Journal für die Kunst)が創刊された。ノヴァーリスの詩『ドロテアに』も載せ、やがてはゲーテやシラー、ヴィーラントの寄稿も期待できるとして華々しく創刊された雑誌であったが、クライストとミュラーが、雑誌に批評欄を設けることの是非で仲違いし<sup>8)</sup>、クライストは第7号の『フェーブス』から手を引くことになった。その後9号10号合併号と11号12号合併号には作品の断片を載せるが、結局11号12号合併号(1809年2月下旬発行)をもって『フェーブス』は最終号となってしまふ。

ところで、理由は明らかではないが、参画者の一人に名をあげられていたシューベルトの原稿が同誌に掲載されたのは、4号5号合併号まで待たねばならなかった。それも科学的な叙述はほとんどなく、同合併号に、同時にシューベルトによる二つの著作が載った。一つは『シラズのヴァイオリン弾きの冒険』と題する短編<sup>9)</sup>と、もう一つは後に発表することになる講

7) *ibid.* S.156 [Adam Müller an Goethe. 17. Dez. 1807]

8) この仲違いになった批評に関する論争が、二人の名を伏せた形で、ミュラーのペンによって7号に掲載された。Vgl. „Phöbus Ein Journal für die Kunst. Hrsg. von H. v. Kleist und Adam. H. Müller Nachwort und Kommentar von Helmut Sembdner“ Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1961, S.361 ff. (以下、„Phöbus“と略記する)

9) 同時代の書評では評判がよくなかった。„Phöbus“ S.631.

演集『自然科学の夜の側面についての見解』中の第8講演からの断片が、『ある講演からの断片』《Fragmente aus einer Vorlesung》と題して掲載された。そしてこの後者の『ある講演からの断片』の話こそが、多くの文学者に刺激を与えることになったのである。

## II-2. 『フェーブス』4号5号合併号

同合併号は、「1808年4月および5月発行」と印刷して5月中旬に発行された。内容は次のとおりである（下線、筆者）。

- I. 悲劇『ノルマン人大公ローベルト・ギスカルト』断片…H. v. クライスト。
- II. 『老人とその翻訳者』…署名 Q. D. B. F. (=ヴェッツェル)。
- III. 『シラズのヴァイオリン弾きの冒険』…署名 rstu. (=Dr. シューベルト)。
- IV. エピグラム『M. と S. (詩人の婚約者と彼女の既婚の姉)』…ノヴァーリス。
- V. 『美に関する講義 (つづき)』…A. ミュラー。
- VI. Faareveile (詩)…A. エーレンシュレーガー。
- VII. 『風刺、喜劇、アリストファネス』…A. ミュラー。
- VIII. 『ある講演からの断片』…Dr. シューベルト。
- IX. 『エピグラム』…H. v. クライスト。
- X. 『風景画について少々』…A. ミュラー。
- XI. 『辺境のミューズとグラティア』…Dr. ヴェッツェル。
- XII. 『ハイルプロンの少女ケートヒェン、あるいは神明裁判』断片…H. v. クライスト。
- XIII. 『ザウルとダーフィト (G. v. キューゲルゲン氏の絵)』…W.

下線を引いた部分でわかるように、後にさまざまな形で作品化される機縁となったシューベルトの『ある講演からの断片』（以下、『断片』という。）

と、そのシューベルトから影響を受けたとされるクライストの『ハイルブロン少女ケートヒェン』(以下、『ケートヒェン』という。)が、『フェーブス』の同じ号に掲載された。両作品の関係については後に詳述するとして、ここではこの事実だけを指摘するにとどめておく。

### II-3. シューベルトの『ある講演からの断片』

この『断片』には二つの話が載っている。一つ目がスウェーデンのファールン鉱山で1719年に起きた出来事についてであり、これを第8講演の中に引用した。二つ目は太古からの自然の地球規模での変容を経て、かつての豊かな動植物界を失ったことも知らず人間が生きている様を手短にまとめたものである。このうちの前者が問題となる『断片』であるが、まずはその全訳を次に記すこととする。

「ヒュルファー、クロンシュテット、それにスウェーデンの学者の日記が述べている例も、いわゆる人間の石化の不思議な例証の一つである。この例でも、外見は硬い石に変化したと見える遺体が、空気が入り込まないようガラスケースの中に入れてられたにもかかわらず、ほんの数年後には崩れて一種の灰になってしまったのである。このかつての鉱夫が発見されたのは、スウェーデンのファールン鉄鉱山で、二本の縦坑の間に連絡坑を作ろうとしていた時だった。緑礬<sup>10)</sup>にすっかり浸透されたその遺体は、初めのうちは柔らかかったが、空気に触れるやただちに石のように硬くなった。50年もの間、200 エレ以上<sup>11)</sup>もある深い穴の緑礬の中に横たわっていたのだ。そして、もしも一人の年老いた誠実な愛する女がそのかつての恋人の面影を胸に秘め続けていかなかったら、不運に見舞われたその若者の今なお変わらぬ面立ちを知っている者はひとりもいなかったらうし、いつから若者が縦坑の中に

10) Eisenvitriol, Melanterit 含水硫酸塩。

11) 『自然科学の夜の側面についての見解』では、「300 エレ」と書かれている。

Vgl. Schubert, Gottfried Heinrich: Ansichten von der Nachtseite der Naturwissenschaft. Nachdruck der Ausgabe Dresden, in der Arnoldschen Buchhandlung, von 1808. Schriften des romantischen Naturphilosophen Abt. I Bd.2 (Verlag Dietmar Klotz) 1995, S.216.

横たわっていたのか知る者もいなかったであろう。引き上げられたばかりの遺体の周りに、人々がその見知らぬ若者の顔立ちを見つめながら立っていたとき、撞木杖にすがりながら白髪の老婆がやってきて、彼女のかつての婚約者だったという死んだ恋人の上に泣きぬれ、膝まづいて、墓場に入ろうとする矢先に再会できたこの時を神に感謝した。人々はこの珍しい男女の再会の光景を驚き見つめていた。なにしろ、一方は死んで墓の中にありながら若々しい外見を残しており、もう一方は、体は萎え老いていながら若々しい愛を誠実に変わることなく抱き続けていたからである。そして、まだ若々しいが硬直して冷たい花婿と、年老いて白髪ではあっても暖かい愛に満ち満ちている花嫁の、50年の金婚式<sup>12)</sup>の時のように思われたからである。」<sup>13)</sup>

この話が、後述するようにヘーベルや E. T. A. ホフマンの創作意欲を喚起することになる。これに続いて、ただ一本の短い実線で区切られただけで何の前置きもなく、二つ目の『断片』が載っている。

「最上部の山岳層の下に非常に豊富な動植物界、それらの類は今では回帰線の間には生きているが、その残滓を隠しているのは、特にシベリアやアメリカ最北部、アイスランドのような北方の世界だけではなく、南極の方でも土地はその昔繁茂した植生と豊かな動物の世界で飾られていたに違いない。確かに、南米最南端のフェド島とその近辺の地域の化石化はまだ知るまでに至っていないが、この方面に航海をするたびに、原野の黒くてむき出しのクリッペ（岩体）が激しい火山性の炎によって煙を出しているのが見られるし、割れて切り立った岩の様子は、火山活動の長い営みを伝えている。したがって、この地域は燃料と、かつての植生から得られた豊富な埋蔵物という点において、地下に椰子の森を持つアイスランドに全く引けを取らないのである。そんなわけで、今ではほとんどいつでも凍てついた大地からほんのヤブ程度のものしか生えていない地帯も、かつては植物繁茂において回帰線の実

12) この『断片』では正しく「金婚式」となっているが、『自然科学の夜の側面についての見解』では、なぜか「銀婚式」と書かれている。ibid. S.216.

13) „Phöbus“ S.239 ff.



り豊かな国々と競い合っていたのである。

あらゆる種類の生き物が、変わってしまった世界から逃げ、生き生きとした自然がそっくり引き揚げの準備にかかっている時に、人間だけが、寂しい廃墟の上に最後に残っている。愛と心の愛着とが硬い岩をより美しく見せるからである。他の生物は世界をその本来の魅力においてしか見ないが、人間の精神はこれにもう一つ新しい微光を加える。そうして今や、何世紀にもわたってその嘆き悲しむ鳴き声を旅人たちが詠ったあの北方の小夜啼鳥も、暗緑色の森やバラの園亭と一緒に、アイスランドから消えてしまったのである。夏になっても緑の葉が茂ることなく草花しか生えない荒れた山地で、人間は、総体的な崩壊にも気づかずに、今ではなくなってしまった園亭や深い緑、小夜啼鳥の歌などを詠った祖先の作った歌をうたっているのだ。」<sup>14)</sup>

以上の二つの『断片』とも、前述したように、講演集の第8講演「有機物について」の中に挿入された話である。いずれの話も、有機物について語り始めながら次第に人間の方に視点を移していく筆致である。医師であり自然科学者であったシューベルトが、自然哲学者でもあったといわれる所以もこのあたりにある。また、それだからこそロマン主義作家たちが彼の講演を聴き、講演集を読んだのであろう。

### III. クライストの『ハイルブロン少女ケートヒェン』

#### III-1. 『ケートヒェン』の夢を中心としたあらすじ

ハイルブロン武具鍛冶師の娘ケートヒェンは、ある日父親の仕事場に立ち寄った騎士シュトラール伯を一目見るなり青ざめ、彼の前にひれ伏す。追っていこうと高い所から跳び下りて大怪我をする。怪我が治るとケートヒェンは、シュトラール伯の所へ行くと言って旅立ってしまう。父親が連れ戻しに行くが、断固として帰らない。その理由が明かされないまま劇は進行する。

---

14) „Phöbus“ S.240.

先祖の代に解決していた土地の譲渡を問題にして、クニグンデなる女性が他の騎士をけしかけてシュトラール伯に戦いを挑んでくる。しかし、却って捕らわれの身となっていたクニグンデをシュトラール伯は助けて、自分の城に連れてくる。城の女官が、クニグンデこそ伯爵が見た夢の中のお相手だと思い込んで、その夢の話をする。一昨年暮れに、シュトラール伯は熱でぐったりとして瀕死状態だったが、奇跡的に回復した。あとで話したところでは、大晦日の晩に、天使が手を引いてくれて闇の中を歩いていったこと、天使が静かに娘の寝室の扉を開け、自分の光で部屋を明るくしながら娘の方へ近づいていったこと、娘が喜びに顔をほてらしながら寢床からおり、伯爵の前に膝まづき頭を垂れて「殿様」と囁いたこと、天使がこれは皇帝の娘だと言ったこと、娘の顔を見ようとしたら侍女が灯を持ってきたので、何もかも消え失せてしまった、そういう夢を見たことがわかった。

結局、ケートヒェンとシュトラール伯は、天使に導かれて夢の中で邂逅していたのである。父親の仕事場で会ったとき、すぐにケートヒェンは夢の中の人に会えた気づいて、シュトラール伯の後を追っていたのであった。皇帝もケートヒェンを落胤と認め、伯はケートヒェンとめでたく結婚する。

### III-2. シューベルトの「講演」との関係

クライストは、『フェーブス』に何篇かの戯曲を断片の形で掲載したし、短編も載せた。クライストにとって重要な作品発表の場であったといえる。『フェーブス』が廃刊のやむなきに至り、ベルリンで『ベルリント刊新聞』(Berliner Abendblätter)を編集発行したときも、同様に同紙が作品発表の場であった。

『ケートヒェン』の場合も、『フェーブス』に断片の形で発表したこと、それも最初に発表したのはシューベルトの『断片』と同じ号であったことは前に述べたとおりである。クライストが『ケートヒェン』執筆に着手したのは、1807年秋とされている<sup>15)</sup>。シューベルトが一連の講演を行って

---

15) „Heinrich von Kleist Leben und Werk im Bild“ Hrsg. von Eberhard Siebert in: Insel Taschenbuch 371 Frankfurt a. M. 1980, S.226.

るのも、同じ年の秋から冬にかけてであったから、時期としては符合する。しかし、内容から考えれば、夢遊病が主要モチーフである『ケートヒェン』が、『断片』に影響を受けた結果の作品でないことは明らかである。前に述べたように、クライストがシューベルトの講演を聞いた可能性はある。そしてさらに、影響を受けたとするならこの第8講「有機物について」ではなく、第13講「動物磁気ならびに若干の関連現象について」である可能性が高い。第13講は、動物磁気療法が神経症の患者、特に女性の患者に有効な治療法であること、その方法としての催眠、催眠中の者の特性、そして夢遊病について述べているからである。

しかし、W. キトラーは、シューベルトの第13講にもその名が出てくる動物磁気療法を実践した医師グメーリン (Eduard Gmelin 1761-1809) の著書をクライストが読んだのではないかと、言っている。グメーリンはハイルブロンで開業し、市民の娘リゼッテ・コルナハーの症例について自著の中で書いており、治療の過程で「医師への完全な信頼と父親に対する理解しがたい反発との間で患者が不可解に揺れ動く」様子に気づく。このことにクライストが関心を寄せたことは間違いない、としてキトラーは、クライストが『ケートヒェン』の女主人公の誕生地をハイルブロンとすることによってリゼッテ・コルナハーをほのめかしているのであるし、また、フォム・シュトラール伯に会って以来、ケートヒェンが魔法にかかったように伯爵を追いかけるようになったが、父親への愛は冷たくなった、これはまさにグメーリンの指摘した症状とぴったり符合する、と言っている<sup>16)</sup>。

このキトラーの説は、あまりに直裁的に結び付けていて容易には首肯しがたい。ハイルブロン地名はよしとしても、父親を忌避する場面など、現象面の相似だけでは説明不足であって、グメーリンの著書をクライスト

---

16) Wolf Kittler: „Die Geburt des Partisanten aus dem Geist der Poesie. Heinrich von Kleist und die Strategie der Befreiungskriege“ Freiburg (Verlag Rombach) 1987 S.205 ff.

が読んだことやそこに書かれていることに関心を寄せたことの証明にはならない。

### III-3. 『フェーブス』に載った『ケートヒエン』

『ケートヒエン』は、『フェーブス』の4号5号合併号に掲載された後、9号10号合併号(1808年10月)に2回目の断片が載せられた。初めの断片は、第1幕第1場と第2幕第1場であり、2回目は第2幕第2場以下第13場までであった。

第1幕第1場は導入部であって、秘密裁判が行なわれている洞窟の中、ケートヒエンの父親がシュトラール伯を訴えたその訴因が明らかになる。ケートヒエンが、あるとき父親の仕事場に立ち寄ったシュトラール伯を見て以来、伯の跡をどこまでも追いかけるようになってしまったというのである。そして第2幕第1場は、洞窟前の森でシュトラール伯が、ケートヒエンを愛しながらも身分の違いから結婚できない辛さを嘆く、長い独白の場面である。そして『フェーブス』に載った2回目の断片、第2幕第2場以下第13場までは、ケートヒエンと両極をなすクニグンデが登場し、シュトラール伯が瀕死の床で見た夢の内容が明かされる。

すなわち、『フェーブス』に掲載された『ケートヒエン』の断片は、いずれも『ケートヒエン』の核心部分と言っていい場面である。完結した形で印刷物として1810年の秋に発表された『ケートヒエン』は、クライストが手を入れているので上記の断片とは異なる箇所があるが、『フェーブス』に掲載された断片が全体の核心部分であることに違いはない。それはまた、『ケートヒエン』創作過程においてクライストが、ケートヒエンとシュトラール伯二人に共通の「夢」の部分を最初に構想したことに他ならない。

### III-4. 第13講における「夢遊病」と『ケートヒエン』

第13講において、シューベルトは次のように言っている。

催眠中の者が目で見ることなく何があるかを知る鋭敏化された共感覚は、すでに

話したように、普通の夢遊病者にもあります。彼らも目を閉じたまま歩き回り、物に当たらぬよう注意深く避けるし、高いところによじ登るときにはしっかりした足場を探って登って行きます。それにふだんと同じ明瞭な字を書き、時計を見て正確に時間を言い、何事も目で見ているかのように振舞うのです。ときには病気の場合にも、すべての感覚が働かなくなったときこのような非常に鋭敏化された共感覚が残ることがあります。一中略—このような共感覚はしばしば失神時にも、またひよっとすると失神と縁続きのいっそう深い状態、死の始まるときにも見られるのではないのでしょうか。

特に興味深いのは、全身を射し貫くようだと言内なる者が言う内なる光で、これがいま申し上げた状態でも劣らず見られることです。深い失神状態のときしばしば目の前に独特な明りが見えると言うし、失神・仮死状態から覚めた者は、ほとんど全員、自分は非常に至福状態にいたと言い、また明るく輝く光に取り囲まれていたようだと言う者も多いのです。

そもそも動物磁気と死の類縁関係こそいけば興味をひく問題でしょう。もはや治療のない病、催眠療法だけが症状を和らげることのできる病を、自然は死によって解決し、死という完全な転身によって病人が人間自然に内的調和を取り戻してくれるのです。催眠は四肢の硬直とか、その他の死と類縁の徴候を第一の効果として持つ場合が稀でなく、この点でも死が大規模に行なうところを、催眠は小規模に行なうものといえます。失神、それに本来の死と最も縁の深い意識なき仮死は催眠と同じか、あるいはもっと高度な快感を伴うわけで、催眠より治療効果が劣るということはありません。仮死から目覚めた者は仮死にいたらしめた病気から完全に解放され、なぜか体力が強まっているのです。<sup>17)</sup>

『ケートヒェン』第2幕第9場で、シュトラール伯が原因不明のまま床に臥せってしまい、熱に浮かされて医者も匙を投げる状態に陥った時の話が出てくる。それは一昨年の暮れのことで、看病している母にうわ言で、大晦日の夜に天使に導かれてある娘のところに行くと言う。そして大晦日の

17) 蘭田宗人編：『太古の夢 革命の夢 自然論・国家論集』ドイツ・ロマン派全集第20巻 (国書刊行会) 1992年 S.83 ff.

夜、うわ言を言いながら伯爵は死んでしまう。しばらく蘇生のための努力がはられるが、すべて無駄に終わる。ところが、しばらくそのまましていると、伯爵は跳ね起き、神が定めた花嫁のところに行ってきたと言い、それからは奇跡のように回復し、もとの体に戻る。

いわば「仮死状態」とも言うべき状態に陥った伯爵が、その夢の中でケートヒェンに出会う場面で、天使がシュトラール伯の手をとって娘の寝室の扉を開け、自分の光で部屋中を明るくしながら娘の方に近づいていった、という描写がある。また、第4幕第2場では、シュトラール伯が眠っているケートヒェンに話しかけて、その大晦日の夜の話聞き確かめる。するとケートヒェンは、「天使のヒェールプ（ケルビム）様が一緒でした。雪のように白いお翼、そして光が——ああ、その輝き！ その天使様に殿様が手を引かれて——。」<sup>18)</sup>と言う。つまり、夢の中で二人が初めて出会う場面で、二人は共通して天使の出す輝く光に包まれていたことを記憶しているのである。まさに、シューベルトが言っている「明るく輝く光に取り囲まれていたよだと言う者も多い」という現象に合致する。

ケートヒェンの夢の中に、天使に導かれたシュトラール伯が入ってきて二人は出会う。しかし、シュトラール伯が「歓喜にふるえながら」彼女の顔を見ようとしたその瞬間、侍女が灯を持ってきたため、ケートヒェンの夢は覚めてしまう。天使の出す輝く光とは違って、侍女の灯は現実世界のものであるから、夢は覚め、二人はそれぞれの現実世界に戻されるのである。現実に戻されたシュトラール伯は自分の城での重病の床で、「ああ、灯を持って来た、ああ、彼女の姿が消えてしまった」とうわ言を「まるでその灯に追われて逃げるような口ぶり」で言い出し、ケートヒェンは自分の寝室のベッドのわきに倒れているところを侍女に見つけられて笑われる。

自分の夢とケートヒェンの夢とが寸分違わず一致していることに衝撃を受けたシュトラール伯は、ケートヒェンから手を放して跳び上がる。そし

---

18) 『ケートヒェン』からの引用は、手塚富雄訳：『ハイルブロン少女ケートヒェン』（岩波文庫）昭和28年発行、に拠った。

てケートヒエンが眼を覚まし、その場に眠り込んでいた言い訳を言うのには耳を貸さず、衝撃を口にする。シュトラール伯の台詞のみをひろくと、次のように彼は独白する。

「おお神々、お護り下さい。おれは幽霊のように夜中に歩き回っている二重の存在なのだ。」「夢と思っていた事が一点違わぬ真実なのだ。瀕死の熱でシュトラール城に寝ていながら、天使に導かれて彼女を訪ねた。私の霊が、——ハイルブロンこの娘の部屋に。」「どうしたらいいのだ。おれは。どうしたら!」「ああ、おれの心は怪しい光に打たれて、怖ろしい狂気の縁をさまよっているのだ。何故なら今でもおれの耳に涼しくはっきりと響いてくる天使の声、彼女は我が皇帝の娘だというあの言葉を一体どう解したらいいのだろう。」

自分のことを「幽霊のように夜中に歩き回っている二重の存在」と言うシュトラール伯ではあるが、彼はシューベルトが先に引用した箇所で言っているような夢遊病者とは異なっている。シューベルトの夢遊病者は、目を閉じたまま現実の世界を歩き回るが、シュトラール伯は、体はシュトラール城にありながら、時空を超えた存在としてハイルブロンに現われるのである。また、シュトラール伯は一人で歩き回るわけでもなく、「天使様が殿様のお手を取って闇の中を連れていかれた」(第2幕第9場)とあるように、天使によって導かれるのである。もはやシューベルトの科学の対象としての夢遊病者ではなく、メルヒエン的詩的世界の人間と言うべき存在である。「時間空間規定がなく、自然の法則は棚上げされている」<sup>19)</sup>メルヒエンの世界であれば、シュトラール伯がハイルブロンに現われても納得できる。

同じく第4幕第2場で、シュトラール伯が眠っているケートヒエンに話しかける場面では、次のような会話が交わされる。「ケートヒエン。眠っているの?」「いいえ、殿様。」「だが瞼をふさいでいるじゃないか。」「瞼ですって?」「そうだよ、しっかりとふさいでいるよ。」「——まあ、いや、そんな

19) Brockhaus Wahrig Deutsches Wörterbuch in sechs Bänden, Vierter Band K-OZ Wiesbaden (F. A. Brockhaus) 1982, S.585.

事があるものですか。」「なに、そんな事がない？ お前それで眼を開けているっていうの。」「ええ、力一ぱい開けておりますわ、殿様。殿様が馬に乗っていらっしゃるのだからちゃんと見えますもの。」この場面のシュトラール伯とケートヒェンの会話ほど長く続くかどうかは別にして、眠っている者が起きている者の問いかけに答えるということ自体は、格別めずらしいことではない。グリムのあるメルヒェンにも同様の場面があって、そこには、グリムによって「多くの人がよくやるように」という断り書きが添えられている<sup>20)</sup>。

こうしてみると、ケートヒェンは夢遊病者ではないし、シュトラール伯もシューベルトの言うような夢遊病者ではないこと、シュトラール伯がケートヒェンの夢の中に現れたのは、彼自身の病気が原因なのではなく、天使がシュトラール伯にケートヒェンが皇帝の娘であることを教えるとともに、二人をめぐり合わせようとしたことによるのだということがわかる。

したがって、シューベルトの第13講にクライストが影響を受けて、『ケートヒェン』を書いたとしても、その影響はそれほど大きいものであったとは言いがたい。確かに、仮死状態にあった者が体験したという「至福状態」や「明るい光に包まれていた」といった共通する事柄はある。また、ケートヒェンと対極をなす存在クニグンデについて、「あの女は自然の三界を組み立てて出来ている寄木細工なんだ。彼女の歯はミュンヒェンの娘のものだ、髪の毛はフランスから来たんだ、頬ぺたの健康そうな色はハンガリーの鉱山の産物だ、君らの感心しているあの立派な体格はスウェーデン産の鉄で鍛冶屋が造り上げたコルセットのお蔭だ。」と言う箇所から、シューベルトの鉱物や鉱山についての講演を連想することはできる。しかし、シューベルトからの影響と呼ぶには、大仰すぎるというものである。

---

20) グリムのメルヒェン『なぞなぞ』(Das Rätzel, KHM 22番)では、なぞなぞの答えに窮した姫が、そのなぞなぞを出した王子から直接答えを聞き出そうとして、眠っている(と姫は思っていた)王子に問いかける、という場面がある。その場面で、「多くの人がよくやるように」という言葉が添えられている。Vgl. Brüder Grimm: Kinder-und Hausmärchen. Bd.1 Märchen Nr.1-86. Stuttgart (Philipp Reclam Jun.) 1982, S.147.



むしろ、当時関心を呼んでおり、シューベルトも講演や著作で論じている夢や夢遊病、鉱物・鉱山について、『ケートヒェン』の中にとりいれながらも、科学としての夢の分析結果、観察結果にとられることなく、クライストは「夢」に独自の文学的な、あるいはメルヒェン的な要素を添加したというべきであろう。さらに明言するなら、シュトラール伯が夢の中でケートヒェンに会ったということだけでなく、その仲介役を天使が演じたこと、クニグンデのこの世ならぬカリカチュア的な姿、彼女のケートヒェンとの両極端的役割、そのほか伯爵の名前を „Friedrich Wetter vom Strahl“ として「雷光」を想起させている点など、すべてメルヒェンの要素として理解できるのである。

#### IV. ヘーベルの『予期せぬ再会』

J. P. ヘーベルの暦物語<sup>21)</sup>の中でも特に有名な話ではあるが、まずは全文を訳出する。

スウェーデンのフェールンで、50 数年前のこと、一人の若い鉱夫が、若く美しい許婚にキスをしてこう言った。「聖ルチアの日には、僕たちの愛は牧師様の手によって祝福を受けられる。そうすれば僕たちは夫と妻になって、僕たちの巣を作るのだ。」——「そして安らぎと愛がそこに宿るのね」と、美しい許婚は愛らしく微笑んで言った。「だって、あなたは私のただ一人の人で、全てですもの。あなたがいなかったら、私は他のどこよりお墓に入りたいぐらいよ。」しかし、聖ルチアの日がくる前に、牧師が教会で二人の名をあげて「それではこの両名が結婚するに異議をとえられない人はいませんか」と二度目に宣告したとき、死神が名乗りを上げたのである。というのも、次の日の朝、若者が黒い鉱夫の服を着て彼女の家のそばを通り過ぎたとき、鉱夫というものはいつも死に装束をしているのだが、今一度窓をたたいて、おはようと声をかけたのだが、今晚とは言わなかったからである。彼は二度と鉱山から帰ることがなかった。彼女はその朝、婚礼の日の彼のために黒いネッカ

21) „Schatzkästlein des rheinischen Hausfreundes“. (1811 年)

チーフに赤い縁取りを付けていたが、彼が二度と帰らないとわかると、それを置いて彼の死を悼んで泣き、彼のことを忘れることはなかった。その間に、ポルトガルのリスボンが地震によって破壊され、7年戦争がおわり、皇帝フランツ一世が亡くなり、イエズス会が解散させられ、ポーランドが分割され、女帝マリーア・テレジアが亡くなり、シュトゥルムエンゼーが処刑され、アメリカが独立し、フランスとスペインの連合軍はジブラルタルを征服できなかった。トルコ軍はシュタイン將軍をハンガリーのヴェテラーニの洞窟に閉じ込め、ヨーゼフ皇帝も亡くなった。スウェーデンのグスタフ王がロシア領フィンランドを征服し、フランス革命と長い戦争が始まり、皇帝レオポルト二世も鬼籍に入った。ナポレオンがプロイセンを征服し、イギリス軍がコペンハーゲンを爆撃し、農民は種をまき刈り取った。粉屋は粉をひき、鍛冶屋たちは槌をふるい、そして鉱夫たちは地下の作業場で鉱脈を求めて掘っていた。ところが、ファールンの鉱夫たちが、1809年の聖ヨハネの日の少し前か後のこと、二本の縦穴の間に穴を掘りぬこうとしていたとき、地下300エレは優にある深さの所だったが、彼らは岩屑と緑礬の中から若者の遺体を掘り出したのである。それは緑礬にすっかり浸透されていたが、そのほかには腐敗しているわけでもなく変わった様子もなかった。ほんの一時間前に死んだか仕事中にちょっと眠り込んだかしたように彼の顔つきも年齢もはっきりわかるほどであった。しかし彼を明るい所に出してやったものの、父も母も、友人たちや知り合いももうとっくに死んでしまっていて、誰一人この眠り続けている若者を知っているとか彼の不幸について知っていると言う者はいなかった。ところが、鉱山にある日入ったきり戻らなかった鉱夫のかつての許婚という人が現れた。白髪で皺くちやの彼女は、撞木杖にすがってその場にやってくると、自分の許婚であると認めた。苦しうにというよりも喜ばしげにうっとりとして愛する人の遺体にとりすがり、やっと長い激しい心の動揺から気を取り直すと、「私の許婚です」と言った。「私は50年間彼の死を悲しんできました。そして今神様が私が死ぬ前にもう一度会わせてくださったのです。結婚式の一週間前に坑口に入ったまま帰ってこなかったのです。」周りを取り囲んでいた人々は、昔の花嫁が今や枯れ萎んだ年寄りの姿となっているのに花婿は若々しく美しいままでいるのを見たり、50年経って彼女の胸の中で若々しい愛の炎が

今一度目覚めたのに、彼は微笑みに口をほころばすわけでもなく、彼女を認めるために目をあけるわけでもない様子を見たりした。また、彼と縁のあるただ一人の者であるから、墓地にお墓の用意が出来るまで彼を手元に置いておきたい、と言って鉦夫たちに彼を彼女の小部屋に運ばせたのを見るにつけ、人々の心は悲しみと涙でいっぱいになった。次の日、墓地にお墓の用意が出来て鉦夫たちが彼を運んだとき、彼女は小箱を開けて赤い縁取りのついた黒いネックチーフを結んでやり、彼の葬式の日ではなく結婚式の日でもあるかのように、自分は晴れ着を着て後に従った。彼が墓地の墓の中に入れられると、彼女はこう言った。「もう一日か十日、冷たい新婚の床でぐっすりお休みなさい。長くは待たせないわ。私もし残したことはほとんどないし、すぐにまいります、すぐに夜もあけるわ。大地は一度返したものを、二度目は返さないってことはないでしょう」と言って、彼女は立ち去り、もう一度振り返った。<sup>22)</sup>

#### IV-1. シューベルトの「講義」との関係

先に訳出したシューベルトの『断片』の最初の話と、ヘーベルの『予期せぬ再会』との関係は直接的なものである。ヘーベルはシューベルトの講演集から直接に刺激を受け、曆物語に採り入れた。しかしながら、厳密に言うと、「300 エレの深さ」となっている点から、ヘーベルが『予期せぬ再会』の源としたのは、『断片』ではなく講演集『自然科学の夜の側面についての見解』であったと考えられる。

シューベルトの『断片』を訳出した際に「有機物について語り始めながら次第に人間の方に視点を移していく筆致である」と述べたが、視点が人間の方を向いても、シューベルトの書き方は比較的淡々としている。これに対しヘーベルの場合は、質量共に膨らみ、一個の文学作品として仕上がっているといえる。これを跡づけるため、次に詳細に『予期せぬ再会』を見ることとする。

22) Deutsche Literatur von Lessing bis Kafka. Digital Bibliothek Band 1, Berlin (Directmedia) 1998, S.37653 ff.

#### IV-2. 『予期せぬ再会』における構成の巧みさ — 50年間経過の表現

『予期せぬ再会』に関する先行論文等で必ず指摘される点は、第一に、鉱夫の遺体は1719年に発見されたのだが、これをヘーベルは1809年とし、読者に対して極めて最近の出来事と思わせていること。第二番目に指摘される点は、対照法や鏡像性といったヘーベルの手法である。生と死、若さと老い、苦痛と喜び、婚礼と葬儀、聖ルチアの日（冬至）と聖ヨハネの日（夏至）、等の対照的な表現が物語を鮮明にし、しかもそれらが50年の歳月の経過を境に鏡像のように反転して描かれているということである。そして第三番目には、その50年の歳月の経過を歴史上の事件の羅列をもって表した、その巧みさである<sup>23)</sup>。

確かにそれらの指摘は正しいものである。しかしながら、50年という歳月の経過をただ単に歴史上の事件の羅列をもって表したのではない。この箇所を詳細に見ると、実に巧みに書かれていることがわかる。

原文は以下のとおりである（下線および斜字体、筆者）。

Unterdessen wurde die Stadt Lissabon in Portugal durch ein Erdbeben zerstört, und der Siebenjährige Krieg ging vorüber, und die Kaiser Franz der Erste starb, und der Jesuitenorden wurde aufgehoben und Polen geteilt, und die Kaiserin Maria Theresia starb, und der Struensee wurde hingerichtet, Amerika wurde frei, und die vereinigte französische und spanische Macht konnte Gibraltar nicht erobern. Die Türken schlossen den General Stein in der Veteraner Höhle in Ungarn ein, und der Kaiser Joseph starb auch. Der König Gustav von Schweden eroberte Russisch-Finnland, und die Französische Revolution und der lange Krieg fing an, und der Kaiser Leopold der Zweite ging auch ins Grab. Napoleon eroberte Preußen, und die Engländer bombardierten Kopenhagen, und die Ackerleute säeten und schnitten. Der

23) 有内嘉宏訳：『ドイツ暦物語』鳥影社 1992年 S.242 ff.、両角隆子：『ある文学的形象の鉱脈「フェールンの鉱山」』福岡大学人文論叢 16(2) 1984年、等。

Müller mahlte, und die Schmiede hämmerten, und die Bergleute gruben nach den Metalladern in ihrer unterirdischen Werkstatt. Als aber die Bergleute in Falun im Jahr 1809…

50年の経過はこのように書かれているが、下線を引いたように、事件と事件の羅列が、何度も何度も „… , und“ で接続されていることがわかる。一見普通の使い方のように見えるが、これだけ機械的に繰り返すことに何らかの意味を求めざるを得ない。

上記の文中斜字体で示した „… , und“ は、世界の歴史の大きな流れを綿々と追ってきたその勢いのまま、すぐ前の die Engländer bombardierten Kopenhagen で文を切らず、これまでと同様に Komma と und でつなげ、 „ , und die Ackerleute säeten und schnitten.“ と、いきなり農民に目を転じさせ、農民たちが世界の大きな事件のさなかにも営々と自分たちの仕事を続けていたことを思わせる。しかし、大げさにそれを主張するのではなく、淡々と同じ書き方で接続する。そしてそこで文を切って、読み手に一息つかせ、Der Müller mahlte, und die Schmiede hämmerten, und die Bergleute gruben nach den Metalladern in ihrer unterirdischen Werkstatt. Als aber die Bergleute in Falun im Jahr 1809… と農民から粉屋、鍛冶屋そして鉱夫たちへと目を移させる。ここでも „… , und“ が使われ、ついには一般的な鉱夫たちからファールンの鉱夫たちへと焦点が絞られていく。つまり、50年間の事件の羅列をつなげた „… , und“ は、斜字体以下に続く „… , und“ の布石として働いており、同じ表現を繰り返すことによって、斜字体部分の „… , und“ を際立たせることなく、自然に民衆たちの営みへと話題を転じていくのである。

また、内容としては die Ackerleute säeten und schnitten という文は、後ろの Der Müller mahlte 以下の文の先頭に置くべきであるのに、前の文に接続され、ここで Punkt が置かれている。ここが重要である。例えば次のように書かれていたらどうだろう。… , und die Engländer bombardierten Kopenhagen. Die Ackerleute säeten und schnitten, und der Müller

mahlte, und… こういう文であったら、世界の歴史的な動きと民衆たちの営みとが完全に切り離されてしまい、世界の大きなうねりの中にあっても民衆たちがたゆまず続けていた日常の行為という連関がなくなってしまうし、読み手にも die Ackerleute säeten und schnitten 以下が唐突な印象を与えることになる。

こうして考えると、この作品の構成が映像として鮮明に浮かび上がってくる。初めにファールンの町の結婚を控えた若い二人の幸せそうな生活が映されていたが、鉱山の事故を境に、映像はヨーロッパ全体を俯瞰するような高い位置からのものとなり、50年間で早送りの映像で表現される。50年過ぎた時点で早送りは終わって通常のコマ送りとなり、映像は途切れることなく俯瞰する位置から一挙に田畑を耕す農民たちをクローズアップ、続いて粉屋、鍛冶屋、鉱夫たち、そしてファールンの鉱夫たちへと移っていく。発見された鉱夫は昔のままの姿であるが、その美しかった許婚は今や撞木杖にすがって歩くお婆さんになっている。

以上のようなヘーベルの書き方によって、『予期せぬ再会』はシューベルトの『断片』から見事に発展して文学的な力を持つ作品となっているのである。

## V. E. T. A. ホフマンの『ファールンの鉱山』

クライストの『ケートヒェン』が初めて上演されたのは、1810年5月17日ウィーンにおいてであった。二度目は同年12月26日グラーツで、三度目は、1811年9月1日バムベルクにおいて上演された。クライストがまだ存命中に、この三回の上演が行なわれた。そして、この三度目の上演に E. T. A. ホフマンが関係する。

ホフマンは、バムベルク劇場の座付作曲家であったが、それだけでは生活できず、声楽やピアノを教えて収入を得ていた。その弟子の一人ユーリア・マルクという13歳の少女に対して激しい恋慕の情を抱き、日記にこの少女のことをケートヒェンの名で記していたという。その苦悩の中から文

学作品が書かれるようになったのだが、1808年から1813年までのバムベルク時代の後半、劇場監督の良き片腕として音楽以外の仕事にも協力して、さまざまな作品を上演し、ドイツ演劇界の注目を集めるほどであった。それら上演作品の中に、『ケートヒェン』があった。

作家 W. ベルゲングリューンは、このバムベルク時代のホフマンについて次のように書いている。(下線、筆者)

「バムベルク時代の諸印象をあますところなく記すのは不可能である。バイエルン人、フランス人、オーストリア人、ポーランド人、イタリア人の部隊が行進して通過する。ホフマンはナポレオンを目撃する。ニュールンベルクはかれに壮麗なドイツ中世を開示する。バムベルクの気ちがい病院はかれに精神生活の暗黒面を一瞥させる。当時、万人の心を奪った磁気および夢遊病がかれの興味をそそる。かれはノヴァーリスを読んで衝撃を受け、シェリングの自然哲学に接近する。かれは教会世界の栄光と情熱とを感じ、教会合唱団でうたい、聖体祭の行列に参加し、カプチン派修道院の招待に応じる。かれは修道院から強烈な感銘を受ける。その影響は『悪魔の霊液』にあらわれている。バムベルクにおけるホフマンの生活は波のように浮き沈みを見せて経過する。病気と困窮の時期が深い亀裂を示す。」<sup>24)</sup>

ホフマンも、この時代に磁気と夢遊病に興味を寄せていたようである。その後、ドレーステン、ベルリンへと居を移し、ベルリンではフケー、シャミツソー、ティーク等と交わることとなる。そういう交友関係の中に、宰相ハルデンベルクの侍医である D. F. コーレフ博士がいるが、彼は動物磁気療法メスメリズムの医者でもあった。彼らとともに「ゼラーピオンの夕べ」という文学結社を作り定期的に自作を披露しあうなど活動していた。この会を記念して発行したのが、ホフマン作品の中でも最もよく知られている短編を集めた『ゼラーピオン同人集』であり、『ファールンの鉱山』もこの中に収められている。

24) W. ベルゲングリューン著・大森五郎訳：『E. T. A. ホフマン 幻想の芸術』朝日出版社 1971年 94頁。

#### V-1. シューベルトの「講演」および『夢の象徴学』との直接的関係

『ゼラーピオン同人集』は、架空の4人の語り手が次々と自作の物語を披露し批評し合うという形式をとっており、古くは『千夜一夜物語』、イタリアのボッカチオの『デカメロン』やバジレの『ペンタメローネ』などと同様の古典的な形式といってよい。

『ファールンの鉱山』は、テーオドルが朗読するが、その前に彼はこう言う。「霊に吹きこまれたんだがね、きみたちもよく知ってるはずの、すでに世の中に書いて発表されたものもあるテーマなんだ、ファールンの一鉱夫に関する長ったらしいものなんだが、これを完成しろって霊が入れ知恵するものでね。」<sup>25)</sup> また、読み終わった後、聞いていたオトマールが「きみの物語は、じつに憂愁迫る印象をあとに残してくれるんだが、ただどうも、スウェーデンの鉱山フレルセの所有者だとか民族的な祝宴だとか、亡霊めいた鉱夫たちだとか、あまりにも贅沢に浪費しすぎるところが、ちょっと気にかかるんだよ。シューベルトの『自然科学の夜の側面についての見解』に見られるような簡潔な描写、若者がファールンの鉱山で発見されたが、そこで年老いた女が五十年まえに生き埋めになった花婿と再会した、といったふうな語り口のほうが深い印象を受けたんじゃないかな」<sup>26)</sup>とと言う。この二人の発言からわかるように、『ファールンの鉱山』は直接的にシューベルトの『自然科学の夜の側面についての見解』、特に『断片』中の第一の話に影響を受けている。特に、最後の場面で、化石となっていたと思われていた鉱夫の遺体が粉々に崩れて灰になってしまった点などは、シューベルトの話と全く同じである。

ホフマンは、『自然科学の夜の側面についての見解』だけでなく、同じシューベルトの『夢の象徴学』も読んでいたし、それどころか、ホフマンの文学そのものがシューベルト哲学の具現化であるとさえ言われている。

---

25) 『ホフマン全集』第4巻I 深田甫訳 創土社 昭和57年 S.345 以下の引用も同書による。

26) *ibid.* S.396 ff.



その中で、『ファールンの鉱山』は、主人公の見るある夢が彼を翻弄しその後の運命を決定づけるという意味で、「夢」が重要なポイントになっている作品である。

#### V-2. 『ファールンの鉱山』における夢

船乗りである主人公エーリス・フレーブムは、長い航海から帰ってみると、三ヶ月も前に母が亡くなっていて、母の形見となるものはわずかな襦袢だけであった。二人の兄は兵士となっており、ほとんど天涯孤独の身となったエーリスは、奔放な船乗りの仲間たちの中へも入れずいる。そこへ老鉱夫トーベルンが現われてファールンへ行って鉱夫になれと言う。その後エーリスは、たびたび同じ夢を見ることになる。最初に見たのは、トーベルンがファールンに行き鉱夫になれと言ひ、鉱山の魅力や鉱石の美しさ、地底世界の壮麗さについて話すのに引き込まれた、その晩のことだった。あまりに美しい地底の世界を見せつけられ、「若者は苦痛と歓喜の名状しがたい感情にとらえられ、愛と憧憬と激しい欲求とが彼の内面に湧きあがって」、水晶の地盤へと身を投げる。突如老鉱夫が現われ、気がつくとは彼が雲つくような大男の銅像と化し、エーリスは驚愕する。そのとき深い底のほうから閃光が走り、地底の女王の顔が見えてくる。エーリスは不安にかられる。もっと上も見るように老鉱夫に促され上を見ると、やさしい母の声が彼の名を呼ぶ。しかし丸天井の裂け目から手を差し込んで、彼の名を呼んでいるのは、愛くるしい若い女性だった。トーベルンは忠告する。「気をつけることだ、フレーブム。女王には忠実にな。あのお方にきみは身を捧げるのだ。」エーリスはもう一度女王の顔を見るが、その途端、自分が溶けて、輝く岩石の中に流れ込んでしまうかのような感じを受ける。そして絶叫しながら夢から醒める。

この初めて見た夢が、その後のエーリスの運命をすべて予言している。そしてこの夢は、通奏低音のようにエーリスの中に響いていく。三日三晩夢に現れた奇怪な幻影に追われ、いつの間にかファールンへの道を進んで

いる。ユラを初めて見たとき、「あの不吉な夢の中で彼に救いの手を差し伸べてくれた少女」だと気づく。愛するユラが他の男と婚約したと聞かされ（ユラに対するエーリスの真意を測るためユラの父親ペールソンが仕組んだ芝居だったのだが）<sup>27)</sup>、絶望して坑道に降りていくと、あの不吉な夢が立ち戻ってくる。女王の手にとらえられ引き込まれたところを、探しに来たペールソンに救われる。エーリスはユラと婚約するが、喜びの中にありながら彼の胸には常に名状しがたい不安がつきまとっている。そして、地底の女王と地上のユラとの間でエーリスは揺れ動き、結局は地底の世界の魔力に引きずり込まれ、落盤が起きて岩石の中に飲み込まれていく。トーベルンの言ったように、エーリスは地底の女王に身を捧げることになる。

エーリスの夢は夢遊病的な夢ではない。夢で見たことが、次第に現実になっていく。それは単に夢が正夢になるという程度のもではなく、エーリスにとって夢の中で見た地底の女王の世界が、地底に下りるたびに次第にそこでの現実になっていく、という意味である。ユラが他の男と婚約したと思ひ込まされ、絶望して坑内に入った時、夢で見た乙女たちや女王が現実として現われる。その数日後、生気を取り戻したエーリスが再び坑内に入ると、見事な鉱脈が眼前にありありと見えてくる。そして、鉱夫長にもペールソンにも、埋蔵量豊かな鉱脈やすばらしく壮麗なトラップ鉱脈を見つけたと告げ、女王自ら石の裂け目に掘り込んだ秘密の記号や意味深長な文字が理解できるのは自分だけである、とまで言うようになる。

地底での「絶頂の幸福感」と地上でのユラと一緒にいる時の歓喜との間

---

27) 父親ペールソンが仕組んだ芝居の前段階において、直前に坑内でトーベルンがエーリスに言う。„Und nimmer wird Ulla dein Weib, das sag ich dir!“ この文が、深田訳及び池内訳（『ホフマン短編集』岩波文庫）では、「どんなことがあっても、あのユラだけは女房にするじゃないぞ、これだけは言うておくからな！」（深田訳）、「いいか、ユラを女房にするでないぞ。くれぐれも忘れまいぞ！」（池内訳）と訳されている。しかしここは素直に「はっきり言うておく、ユラはお前の女房にはならない！」と訳すべきではないか。そう予言的に言われたからこそ、直後に「婚約芝居」を見せつけられ、予言が当たったと思ひ込み絶望するのである。この点、種村季弘訳『ファルンの鉱山』（ユリイカ 昭和50年2月号 特集=ホフマン 悪夢と恍惚の美学）は「それに言うておが、ウラは請け合ってお前の嬬アにはならんのだ！」と訳されている。

で、エーリスは振幅する。結婚式の日、聖ヨハネの日に婚礼衣装に身をつんだエーリスは、花嫁の部屋をノックする。扉を開けたユラは、死人のように蒼ざめ、眼には暗く火花を放つ炎がめらめら燃えているエーリスをみて、愕然とし後ろに跳びのく。そして、エーリスは、「昨夜なにもかも明らかになったんだが」と、夢を見たことを暗示させ、「地底の深所の緑泥石や雲母の中には、赤い桜桃色の閃光を放つアルマンディーンが封じ込まれていて、その上にぼくたちの運命が刻み込まれている」ので、それを結婚の贈り物として掘りに行ってくる、と言って出かけてしまう。別れ際に、エーリスはウラに、すぐに帰ってくると言いながら、„Gehab dich so lange wohl!“ と言っている。ヘーベルの場合の、„Guten Morgen!“ に比べて、不吉な結末を予感させる挨拶である。ユラとの幸せのためにしなければならないと、口では言っているエーリスであるが、この挨拶にも、もはやこの時のエーリスは地上の現実にはではなく、地底の女王の世界を現実とした存在となってしまっていることがみてとれる。

### V-3. シューベルトの『断片』との関係

ホフマンは、『フェーブス』誌に載った『断片』を読んだのではなく、先のゼラーピオン同人オトマルが言っているように、『フェーブス』後にシューベルトが著した『自然科学の夜の側面についての見解』を読んだと考えるとよい。したがってまた、『断片』との関係は直接にはないと考えられる。ホフマンは、『自然科学の夜の側面についての見解』にあるファールンで起こったエピソードを、自分の作品の大団円の一部としてかなり忠実に使用したのである。落盤から50年後、鉦夫たちが二本の縦穴の間に穴を掘りぬこうとしていたとき、緑礬、そして若者の遺体が灰になってしまったこと、これらは『断片』にも記述されている。しかし、「地下300エレの深さ」については、『断片』とは異なっており、『自然科学の夜の側面についての見解』およびヘーベルと同じである。また、「聖ヨハネの日」は、ヘーベルにはあるが『自然科学の夜の側面についての見解』には記述がない。

これらの違いはどこからくるのか。

「地下 300 エレの深さ」とした原因は定かではないが、『自然科学の夜の側面についての見解』を著した際、シューベルトが手を加えたことは確かである。シューベルトは、深さを『断片』には 200 エレと書いたものを 300 エレに延ばし、50 年の金婚式を銀婚式と間違って書き換えているのである。しかし、「聖ヨハネの日」については、シューベルトはどこにも記述してはいない。これは、先にヘーベルの項で述べた、聖ルチアの日（冬至）と聖ヨハネの日（夏至）等の対照的な表現を用いたヘーベルの手法によって生まれたものである。すなわち、「聖ヨハネの日」をホフマンは、ヘーベルの『予期せぬ再会』から引き継いだと考えられる。『フェールンの鉱山』を読み始める前に、テオドールが「きみたちもよく知ってるはずの、すでに世の中に書いて発表されたものもあるテーマなんだ」と言っているが、「すでに世の中に書いて発表されたもの」にヘーベルの作品も含まれる可能性は極めて高い。

## VI. おわりに

シューベルトからの直接的な影響は明らかではないが、同時代人としてクライストは、『ケートヒェン』において「夢」をモチーフとした。そして、天使に導かれ夢の中で運命的に出会う二人が最後に結ばれるまでを、シュトラール伯を追いかけるケートヒェンの不可解な行動の理由を次第に解き明かしながら描くという手法で書いた。あの『ミヒャエル・コールハース』の冒頭で、コールハースを「当時の最も正しいまた最も恐ろしい人物」と評し、「正義の心が彼を盗賊とし人殺しとした」という一見矛盾するような表現によって、最初に読者に謎を与え一気に物語へと引き込む、クライスト得意の「謎解き」の手法であるともいえよう。

また、他のクライストの戯曲には見られない天使の登場等、ほとんど現実離れた設定という意味において、『ハイルブロン』の少女ケートヒェンは極めてメルヒェン的な作品であると言える。

ヘーベルは、シューベルトから直接題材を引き継いだという意味では影響を受けたといえる。しかしながら、50年間の時間の経過を世界史的事件の羅列をもって表しながら、巧みに庶民の日常的な営為も続けられていたことを表現している点や、俯瞰とクローズアップとも言えるような視覚に訴える構成などヘーベル独自であり、この作品が名作とされる所以であろう。さらに、50年の歳月を境として、わかりやすく対照的に描写する。庶民にとって唯一の読み物であった暦物語『ラインラントの家庭の友』を編んでいたヘーベルだからこそその描き方である。

ホフマンは、「夢」に魔力を与えた。エーリスが見た不吉な夢は、あたかも老鉱夫トーベルンに催眠術をかけられたかのように、常に彼の脳裏から離れず次第に彼を支配していく。そして、「丸天井の裂け目から手を差し込んで、彼の名を呼んでいる愛くるしい若い女性」は、婚礼の日に坑内に入ろうとするエーリスを引き止めるユラの姿であることが最後に判明する。こういう夢のもつ予言能力については、シューベルトも『夢の象徴学』で何度も触れているが<sup>28)</sup>、この点では、『ファールンの鉱山』と『ケートヒェン』には共通するところがある。

このように、シューベルトの著作は、これに刺激された詩人たちが、さまざま形式の文学を創作する源となった。それは、オムニバスの本来の意味「乗合自動車」のように、詩人という客を次々と乗せては降ろし、19世紀ドイツ文学の世界を走り抜けて行ったかのようである。

28) G. H. シューベルト著・深田甫訳：『夢の象徴学』ドイツ・ロマン派叢書（青銅社）1976年 143頁等。